日本歯科医史学会々誌・第24巻
第4号通巻93号・平成14年9月

仏の三十二相と歯科医学[*1]

日　高　三　郎[*2]

要旨：仏の三十二相とは健康，大身，柔軟という身体的特徴の羅列であるが，その表現するところは荒唐無稽・皮相浅薄であって，現代的には受け入れ難い．しかしながら，32相のうち，歯，口，舌，味など7相は歯科医学に関連した事柄であるので，ここに歯科医学の特色があると考えられる．そこで，三十二相に関して法華経経文上と日蓮解釈との違いを比較した．日蓮の解釈は経典上の記述を否定するものでなく，全的生命観に立ち還るものであった．この全体的・総合的生命は，歯科医学における「生命の部分観」を克服する方途を示唆すると考えられる．

Key words：仏の三十二相　Buddha's thirty-two features，日蓮の解釈　An interpretation on Nichiren，生命の部分観と全体観　An analysis on life from total point of view and partial point of view，歯科医学　Dentistry

緒　言

大乗仏教経典の法華経における仏の三十二相とは，仏の身体的偉容を足裏の千輻輪相（足下二輪相のこと）から頭頂の無見頂相（頂髻相のこと）まで各部位にわたって説明するものである．**表1**に示したように，手，足，肩，脇，身長と身幅，口，歯，舌，皮膚，陰部，眼色，睫毛，眉間の白毛，身毛，身体から放たれる光，などについて記述がある．現代の歯科医学が治療，研究の対象とする口と歯，舌という口腔器官に関する説明を三十二相中7相も含んでいることが特色である．仏の口からは青い蓮華の芳香が漂い，仏の歯はその優れた教えを表して色は白く形整い，欠けることも着色もなく，舌は赤く頬は獅子のように豊かであると表現される[1]．なお，仏の場合は三十二相と八十種好と一緒にして「仏の相好」と併称されることが多い．

元来，三十二相は仏が衆生を教化するにあたり，渇仰心を起させるため色相荘厳の姿を現したものであって，上述の如く健康，大身，柔軟に代表される相を示しているが，現代人のわれわれがそのまま信じるには困難である．但し，現実生活に於いて見掛け上の姿，虚栄心，地位，名声を追い求めるという意味では三十二相即ち，色相荘厳の考えは生き続けていると言える．

ここでは，はじめに大乗仏教の最高の経典である法華経経文上の三十二相について，次に法華経による人間の魂の解放を叫んだ日蓮の著作の三十二相を述べる．その上で，三十二相から歯科医学を考えてみたい．上述の如く歯科医学は見掛け上の身体的特徴，即ち皮相浅薄な印象を与える三十二相中のうち7相も占める．この点に，他の医学分野と比較して良きにつけ悪しきにつけ歯科医学の特色があると考えられる．

---

*1 Buddha's Thirty-two Features and Dentistry

*2 Saburo HIDAKA, Department of Dental Hygiene, Fukuoka College of Health Sciences and Somoku-Sha, Fukuoka　福岡医療短期大学歯科衛生学科・草木社

表 1　仏の三十二相（大智度論巻四より）

1) 足下安平立相（足の裏全体が高低ある地の上でも密着安住している）
2) 足下二輪相（足の裏，あるいは掌に千の輻の肉紋がある）
3) 長指相（手足の指が長く繊細なこと）
4) 足跟広平相（くびすが広く平らかであること）
5) 手足指縵網相（手足の指の間にみずかきがあること）
6) 手足柔軟相（手足がきわめて柔らかいこと）
7) 足趺高満相（足の甲が隆起していること）
8) 伊泥延腨相（伊泥延は鹿の一種で，股が鹿のように繊妙であること）
9) 正立手摩膝相（立てば両手が膝を超えること）
10) 陰蔵相（象馬蔵相ともいい，陰部が象や馬のように内部に隠れていること）
11) 身広長等相（身体の縦横の長さが等しいこと）
12) 毛上向相（身毛がすべて上に向かって右旋していること）
13) 一一孔一毛相（身毛が一つの毛孔に一本ずつ生えていること）
14) 金色相（皮膚が黄金色であること）
15) 丈光相（身より一丈の光明を放つこと）
16) 細薄皮相(皮膚が薄く柔らかくなめらかなこと)
17) 七処隆満相（両手・両足下・両肩・うなじの七ヶ所の肉が隆起していること）
18) 両腋下隆満相（両わきが隆起していること）
19) 上身如師子相（上半身が師子のように威容端厳であること）
20) 大直身相（身体が広大端直であること）
21) 肩円好相（両肩が豊満していること）
22) 四十歯相（歯が四十あること）
23) 歯斉相（歯がそろっていること）
24) 牙白相（牙が四つあって鮮白であること）
25) 師子頰相（ほおが師子のそれのように豊広であること）
26) 味中得上味相（最上の味感を有すること）
27) 大舌相（舌が広く長く柔らかく顔をおおって髪のはえぎわまでとどくこと）
28) 梵声相（音声が明了に遠くまで聞こえ，かつ清浄であること）
29) 真青眼相（ひとみの色が青蓮華のように紺青であること）
30) 牛眼睫相（まつ毛が牛のそれのように長く整っていること）
31) 頂髻相（頂上に肉が髻の形をして隆起していること）
32) 白毛相（両まゆの間に長い白い毛が右回りに巻いて生えていること毫光を放つ）

法華経並開結の三十二相[2)]

法華経の開経である無量義経徳行品第一に，仏の生命を言い表すのに所謂「34 個の非ず」の語句に続いて三十二相の説明が出てくる．身体的特徴を個別に列挙した後，① **是の如き等の相三十二あり　八十種好見るべきに似たり**．(如是等三十二相．八十種好似可見)．この初出箇所は三十二相の定義的部分と捉えることができる（なお，三十二相の名称・順位は表 1 に示した)．一方，結経の観普賢菩薩行法経では，② **普賢菩薩身相端厳にして紫金山の如く，端正微妙にして三十二相皆悉く備え有てらん**．この箇所は釈尊の滅後このような六牙の白象に乗った端正な普賢菩薩が出現して布教するという意味である．

妙法蓮華経中では，③ **綵画して仏像の百福荘厳の相をなすこと**（方便品第二）とあるが，これは三十二相の一相が百の福徳から成り立っていることを示すものである．続く譬喩品第三では釈尊の説法に再びめぐり合い感激した舎利佛が仏の教えを賛嘆するに，④ **金色三十二　十力諸の解脱　同じ共一法の中にして此事を得ず．八十種妙好　十八不共の法　是の如き等の功徳　而も我皆已に失えり**，と苦悩に満ちた過去を振り返る．また滅を得たと思い込んでいたが，⑤ **是れ実の滅度に非ず，若し作仏することを得ん時は，三十二相を具し大衆の中で作仏する**，と．このように三十二相の有無が作仏の成就・不成就と関連する．また須菩提の作仏を授記するに，⑥ **最後身に三十二相を得て端正姝妙なること猶宝山の如くならん**（授記品第六)，としてここでも三十二相は作仏の姿をとる．⑦ **三十二相を具しなば乃ち是れ真実の滅ならん**（化城喩品第七)，ここの滅もまた作仏である．次には，⑧ **普く皆金色に，三十二相をもって自ら荘厳せん**(五百弟子受記品第八)．提婆達多の善知識によって仏が具足するものとして，⑨ (仏が)**三十二相，八十種好**（提婆達多品第十二）を備える，と．また，八歳の龍女の成仏に舎利佛が疑念を抱くが，それを見取った釈尊が，すかさず（言論未訖)，⑩ **深く罪福の相を達して，徧く十方を照らし**

たもう．微妙の浮き法身　相を具せること三十二八十種好を以って　用って法身を荘厳せり（同品）．またさらに，⑪宝蓮華に坐して，等正覚を成じ，三十二相，八十種好あって，普く十方の一切衆生の為に，妙法を演説するを見る(同品)．このように龍女の優れた姿によって舎利佛を納得させる．安楽行品第十四では，⑫諸仏の身金色にして百福の相荘厳したもう．妙法蓮華経従地湧出品十五では，地の下より湧き出でる菩薩群の様が，⑬地皆震裂して，其の中より無量千万億の菩薩摩訶薩有って，同時に湧出せり．是の諸の菩薩は，身皆金色にして，三十二相，無量の光明あり．これは動執生疑を起こした迹化の菩薩に応答した箇所である．法師功徳品第十九では，⑭十方無数の仏，百福荘厳の相あって，衆生の為に説法したもう．これは百福で一相の意味．最後に，三十二相という語句こそ出てこないが，⑮頂上に肉髻光明顕照す．其の眼長広にして紺青の色なり．眉間の毫相，白きこと珂月の如し．歯白く，斉密にして常に光明あり．唇の色赤好にして頻婆果の如し．(妙荘厳王本事品第二十七)．以上15箇所を分類すれば，Ⅰ）三十二相偉容：①，②，⑧，⑨，⑮，Ⅱ）一相百福：③，⑫，⑭，Ⅲ)疑念払拭：⑩，⑪，⑬，Ⅳ)成仏の証拠：④，⑤，⑥，⑦，となる．但し，Ⅲ）とⅣ）の根拠はⅠ）であり，Ⅱ）はⅠ）の構成の説明であるから，何と言っても法華経文上ではⅠ）を根本とする．

日蓮の三十二相[3)]

十法界明因果抄（文応元年，39歳）：十法界とは地獄，餓鬼，畜生，修羅，人，天，声聞，縁覚，菩薩，仏の十種類の衆生の境界をいう．三十二相はこのうち尊極の仏界の因縁を明かすのに使用される．即ち，①因位に於いて諸の戒を持ち仏果の位に至って仏身を荘厳す三十二相・八十種好は即ち是の戒の功徳の感ずる所なり．つまり，三十二相はあくまでも仏の姿の形容なのである．しかし菩薩界から仏果に至るとするのは，法華経以前の教えであって，日蓮の悟りとは甚だしくかけ離れている．日蓮の教えは，歴劫修行でなくて直達正観であり，見栄えのしない取るに足りない凡夫（これを博地の凡夫という）のわれわれも一生のうちには必ず仏の位に至るとされる．

木絵二像開眼之事(文永元或は10年,43或は52歳)：②仏に三十二相有ます皆色法なり，で始まるこの著作が三十二相に対する日蓮の特色が顕著に表されている．ここでは，仏には三十二相があるが，三十一相までは作り描くことができても，梵音声だけは描くことも作ることもできないから，生身の仏と同じではないとして，音声の一相だけを別にする．歴史的に明らかなように，釈尊滅後，仏を求める心から木像・絵像が造られた．③仏滅後は木画の二像あり是れ三十一相にして梵音声かけたり故に仏に非ず又心法かけたり，と．心法つまり説教がない．だから，生身の仏と木絵の像とでは雲泥の差がある．④木画の二像の仏の前に経を置けば三十二相具足するなり，そこで，仏像の前に仏の声教たる経典を置くことで三十二相が具することになるではないか，と．しかし，三十一相の木絵の前に安置する経典によってもまた仏となるのに差が出てくる．阿含経では声聞に等しく，共般若経では縁覚に等しく，華厳・方等・般若の別円の経では菩薩に等しくなるが，これらでは仏ではない．仏像の前に法華経を置く事で正しく純円の仏となる，と．この行為が真の開眼の意味だが，日蓮は当時多くの開眼が真言に依っていたのを激しく破折する．ところで，法華経の文字は作り描きえない仏の声をかたちに現して衆生を利益するものである．この声を人が出すのに二つある．一つは随他意の声で，人をだますために出す声で，二つは自分の思っていることをそのまま声にあらわすもので，随自意の声である．随他意は他人に合わせるため響きも内容も飾りがある．これは色相荘厳であって，法華経以前の三十二相の解釈に通じる．一方，随自意の声は飾り立てる必要がない．ありのままである．法華経は仏の随自意の教えである．だから，法華経の文字は単なる文字と思ってはいけないのである．それはとりもなおさず仏の御意なのである．自分のこころを相手に伝えようとすれば，書くことよりも，最初は話すことにある．日蓮が“声”に着目したのは卓見と言わざるをえない．⑤法華経を心法とさだめて三十一相の木絵の像に印すれば木絵二像の全体生身の仏なり，草木成仏といへるは是なり．さらに非情である草木の成仏の法理が説かれる．草木に法華経の魂を入れてこそ，草木が仏と顕れ衆生を利益するので，三十二相の議論が円満に解決する．日

蓮の御本尊は，木像や絵像でなく文字による曼荼羅であるので，文字使用の意が尽くされねばならない．その意味では「日蓮がたましひをすみにながして・かきて候ぞ信じさせた給へ」（経王殿御返事）が参考となる．さらにまた前出，法華経経文の⑩深く罪福の相に達して徧く十方を照らしたまうが，生身得忍であり，龍女の微妙の浄き法身・相を具せること三十二が，即身成仏であると．このように，三十二相は法身があらゆる福徳を備えていることになり，凡夫の肉身のままの姿で成仏となる．これにより，三十二相は改めることなくそのまま成仏する．

四条金吾殿御返事（文永9年9月，51歳）：これは梵音声御書の別名がある．⑥**仏には三十二相そなはり給う．一一の相，皆百福荘厳なり．⑦肉髻・白毫なんど申すは菓の如し．因位の華の功徳等と成って三十二相を備え給う．**一相が百の福徳で成立する．見かけの姿は原因あっての結果に過ぎない．その因は南無妙法蓮華経であることに間違いはない．さらに，⑧**梵音声と申すは仏の第一の相なり．**仏の声とは権力や武力によらず，真実と慈悲との広大さ，深遠さによる．社会的には権力者の声がある．王の一声で国が破れたり，栄えたりする．だから，指導者とか権力者もこの梵音声を備えているのである．

御衣並単衣御書（建治元年，54歳）：身を装う衣は三十二相の範疇に入る．衣を法華経に差し上げると，法華経の69,384の文字がすべて仏となる．⑨**応化非真仏と申して三十二相八十種好の仏よりも法華経の文字こそ真の仏にてはわたらせ給いて，**とあるのは，仏が衆生済度のため相手に応じていろいろ姿を変えた（応化した）三十二相の仏は世情随順であって，法よりも劣るということである．ここにも三十二相よりも法華経の文字こそ不可欠であることが強調される．

法蓮抄（建治元年，54歳）：⑩**仏には必ず三十二相あり其の相と申すは梵音声・無見頂相・肉髻相・白毫相・乃至千輻輪相等なり，⑪此の相三十二相の中の一相をば百福を以って成じ給へり．**このように，一一の相が，百福でできている．この一福は乃至三千大千世界の一切衆生の眼の盲たるを本の如く一時開けたらんほどの大功徳であるから，一相の功徳でも数え切れない．また，⑫**釈迦如来の御身は金色にして三十二相を備へ給ふ，彼の三十二相の中に無見頂相と申すは，**として曽谷法蓮の親孝行を褒めるに，三十二相中の無見頂相を引かれている．また，この抄には「（釈尊に対しては）諸の天人は渇仰し，すべての仏法の信仰者たちは恭しく敬った．しかし提婆達多を人々は尊ばなかったので，何とかして仏を超える世間の名声を得たいと懸命になった」と書かれている．提婆達多とは釈尊にことごとく敵対して裏切った者である．この嫉妬深い男のことは，「名聞利養深かりし人」，「そねむ心深くして」として，その本質は男の嫉妬心であるとされる．この裏切り者には眉間の白毫相と足裏の千輻輪相の二相が欠けていて，他の三十相は備わっていたのである．一時は，提婆の方が釈尊よりも勝れていると，世間が欺かれたほどであった．しかし，法華経序品第一に「爾の時に仏，眉間白毫相の光を放ちて，東方万八千の世界を照らしたもうに，周徧せざることなし．下，阿鼻地獄に至り，上，阿迦尼吒天に至る」とある．白毫相は述べてきたように三十二相の一つであるが，日蓮の御義口伝によれば，これは十界の衆生が皆ことごとく成仏するという証文である．提婆達多は阿鼻地獄に落ちていたが，この白毫相の光が届いたことにより，天王如来の成仏の記別を受けるのである．

御義口伝（弘安元年，57歳）：寿量品27箇の大事，23番目の久遠の事にこの記述がある．この品の本意は久遠であること明かしたうえで，無作三身とは働かさず，つくろわず，もとのままであることを説明するが，文中に，⑬**三十二相八十種好を具足せず，是れつくろわざるなり，**とある．つくろうとは自分の弱さを何かで備えることで補いよく見せようとすることである．釈尊は衆生を化導するためわざわざ身を荘厳し，それによって衆生に渇仰心を起させようとした．日蓮による解釈では，色相荘厳を否定して凡夫の姿そのままであるから，つくろわずとなる．その結果，法華経に出てくる経文上の三十二相は無意味となり成立しない．

御講聞書：ここでは，与えられた身体より他に肉身はないのであって，三十二相・八十種好が無いのは，それは即身成仏だからであると説明されている．⑭**父母果縛の肉身の外に別に三十二相・八十種好の相好之れ無し即身成仏是なり．**

新池御書（弘安3年，59歳）：ここでは，⑮仏

に成り候事は別の様に候はず，南無妙法蓮華経と他事なく唱え申して候へば天然と三十二相八十種好を備うるなり，一略一三十二相の嘴出でて八十種好の鎧毛追生そろひて実相真如の虚空にかけるべし，のように書かれている．ここでは他の御書と趣を違えて，三十二相は決して不必要ではないという，説明となっている．成仏について不安を抱いている婦人信徒に対して，三十二相は備わりますよ心配いりませんよと応えられているところである．

以上，日蓮御書の三十二相は，Ⅰ）因位あっての功徳：①,⑦,Ⅱ）作り描ける31相と梵音声(法華経)：②，③，④，⑧，⑨，Ⅲ）草木成仏，即身成仏：⑤,⑭,Ⅳ）一相百福荘厳：⑥,⑪，Ⅴ）三十二相の例：⑦,⑩,⑫,Ⅵ）繕わず(無作三身)：⑬，Ⅶ）南無妙法蓮華経：⑮，となる．ともかくも，日蓮に於いては法華経の文上解釈をただありがたく頂くわけでなく，三十二相にも因があっての故だと，洞察する．経文上のⅡ）の一相百福だけは取りいれても，決定的に偉容の三十二相はもはやいらぬとする凡夫のままでの成仏である(⑬)．梵音声に着目して，残る31相の成仏は声によるとし，声は法華経の文字であると．法華経でなければ，木絵の像という草木から作られた物は成仏しない(草木成仏の法理)．このように，日蓮は三十二相を切り捨てたわけではなく解釈し直したのである．それは，権力との闘争を通して釈尊が成道した原因を探し，ひと度は法華経という教典に立ち還り，この経の心を命がけで救出することであった．日蓮の立場においては，結果として色相荘厳の仏の姿も絶待妙の立場から自由に援用される．法華経の心を救い出した日蓮において大事なのは御義口伝に明らかな如く“久遠”の事であって，これこそを南無妙法蓮華経と言う．また，提婆達多を三十二相を追い求めた虚栄の典型的人物として注目したい．裏切り者の出現によって常に事柄が現実味を帯びてくるからである．

さてこれら日蓮哲学から導き出される結論は，「見掛け上，浅薄，生命の部分観」に対するに，徒に嘆きニヒリズムに陥ることなく，ひと度は「全生命的立場」に立ち還れとの叫びではないだろうか．このような観点から，歯科医学のニヒリズムを克服するに生態学的な癒しを持ち来る丸橋[4]の主張は，歯科医学に全生命的立場を回復しようとする努力として評価できる．

歯科医学と三十二相[1]

表1に示すように，三十二相中25相の身体的特徴は医学というよりも体育学に関係が深いが，残り7相は歯科医学関連である．それらは，22～24）の歯に関する相，25）の顔貌に関する相，26）の味，27）の舌に関する相，28）の発声に関する相である．

通常大人の歯数は32本である．しかるに仏には40本の歯がある［22；四十歯相］とする．これに対しては過剰歯に根拠を置いた説明があるが[5]，常識的にはこの歯数説は受け入れられるものではない．牙白相（24）の歯の色が白いことは洋の東西を問わず，美の象徴であり憧れと健康のイメージであって，賞賛されてきており，“明眸皓歯”として現代でも受け入れられている．これら22）の四十歯相と24）の牙白相のことは，23）の歯斉相を含めて，“この世にもまれな非常にすばらしい健康で整った歯並び”と解釈するのが現代では妥当であろう．つまり，色が白いこと（牙白相）や歯の形が揃っていること（歯斉相）だけを強調するのは現代のわれわれには迷信と映り，不自然の感を抱かせる．そういう意味では，三十二相は必要なしとする日蓮の解釈はすこぶる現代的であって，われわれには納得がいくものである．しかしながらなお，近年，生活が豊かになり歯科治療に対する患者の要求が変化し，歯の色調，歯並び，顔貌とのバランスなどの審美的要求が増加して来ている[6]．このため見掛け上の問題ではあるが，白い歯を求めて歯の漂白法が流布しており，元来，歯並びは歯牙う蝕予防からも大切な問題である．25）の頬については，顔貌の問題である．歯の喪失と入れ歯は28）の発声とも関係していて，これらも日常生活上で大切な問題となる．さらに，26）の味と27）の舌の問題と28）の発声のことは，最近の高齢社会での口腔ケアの問題となって歯科医療領域で注目されつつある[7]．

歯科医学の治療において，歯と歯並びは“審美”的に生かされている．しかし，色相荘厳の意味を取り間違えればすぐにも虚飾，見掛けだけの人間を製造してしまうだろう．良し悪しは別としても，ここに歯科医学の特色がある．これには日蓮の“慈悲”を「援用」すればよいだろう．治療にあたっ

て，根底に“慈悲”が必要だからである．この“慈悲”はキリスト教の“愛”と通じるものがある．一度生命的なるものに立ち還り人間回復をした後であれば，現代人の肥大した欲望に是は是，非は非と厳しくも慈しみ深く対処できると考えられる．歯科医学は部分観からの脱出のためにいつまでも現状を嘆くより，一旦，口腔という部分観を離れ全的生命に立ち還ることにより，再び口腔に戻ってくるべきである．ここに歯科医学の将来像が望まれる．

まとめ

1　歯科医学は皮相，部分感を否めない．このことが医学に比べ後発の学問であること，哲学の不備，ニヒリズムに陥っていることの論議とつながる．

2　歯科医学には皮相的な32相中の7相が含まれるが，日蓮哲学を根拠とすれば，一度心の回復する地点に立ち還ることで，7相の特色が発揮される．

3　歯科医学では歯並び，歯の色，顔貌は慈悲を根底とした治療によって，現代人の肥大した欲望に，ある時は厳しくある時は優しく対処できる．

4　味と舌と発声については，口腔と全身の問題である．高齢社会におけるこれらの問題の解決は，歯科医学の方向性が全身的基盤であることを確立することになると思われる．

[註]

1) 日高三郎：法華経の中の“歯”，“口”，“舌”，日歯医史誌，24：16-21,2001.
2) 三十二相の語句を探すにあたり，創価学会教学部編：法華経並開結（上下），聖教新聞社，第12刷，東京，1986，をテキストとした．
3) 三十二相の解釈を探すにあたり，堀　日亨　編：日蓮大聖人御書全集，創価学会，東京，1983，をテキストとして用いた．
4) 丸橋　賢：歯科医学にとって市民権とは何か(上・下)，歯界展望65：1009-1016，65：1425-1434，1985.
5) 中原　泉：仏陀の歯相，日歯医史誌，21：195-201，1996.
6) 久光　久，松尾　通　編：歯の漂白，デンタルフォーラム，東京，1992.
7) 藤島一郎，藤谷順子：嚥下リハビリテーションと口腔ケア，メヂカルフレンド社，東京，2001.

著者への連絡先：日高三郎
〒814-0193 福岡市早良区田村2丁目15番1号
福岡医療短期大学
TEL：092-801-0411，内線　108
FAX：092-801-4473